

第十章 ギルド社會主義の綱領

吾人若しオレージ著なるか、又はホブソン著オレージ編なる「國家的ギルド、賃銀制度及びその改良策に関する研究」を繙かば、吾人は其内にコール氏と同一の見解を多々發見するのであるが、然しながら議論の方法は異つてゐるのであつて、軋拭を弄ぶニューハウンドランド産の小犬の如き嬉々たる愉快さを持つて吾人の經濟組織改造の問題を論じて居る。即ち社會顛覆を欲する人々の多くに共通なる臆斷即ち勞働は現在生産されたる凡ての物を生産するも之を搾取する海賊共に依つてその生産物の大部分を掠奪さるゝ事、而してかかるが故に掠奪者を、掠奪者の取扱はれねばならぬ様に取扱ふは、勞働者當然の義務であると言ふ臆斷から出發して居るのである。茲に本書の文體と併せて主張せる方法との實例を示して見れば「勞働は餘剩價值の一文をも剩さず全收する時而已、其解放が可能となる事を知らなければならぬ。こは地代及び利息に對する不撓不屈の侵略に依つて行ふ可で日刊及び週刊の社會主義的出版物は市會選舉に於ける二三の僅少なる成功や、或は議會に於ける花形辯士の光彩燦爛たる雄辯に就ては報道せず。地代搾取者及び暴利者が全體に

於て彼等の所得の減少するを見る程に賃銀の増額せられたることに就て報道すべきである。夫れ以外には他に方法はない。利潤は實際地代に外ならない。亦地代は其形式の如何を問はず之れを其の要素に還元する時は、一人の人が他の人亦は人々の團體に對して壓迫的に行使する經濟力に他ならないものである。されば地代を掠奪する力を破壊するときは、實質的に地代は破壊されるのである。これ救濟解放の唯一の方法であり、亦束縛よりの唯一の解放である」と云ふてゐる。是即ち餘剩價值は勞働の生産し而して他人に依て掠奪さるゝものであると云ふ臆斷に基いた議論である。實際前の諸章の研究に於て見る如く、勞働は經營、原料、及び機械の助力を俟つて餘剩價值を創造するのであつて、是等のものは或る他の人に依つて供給さるゝに、勞働自ら其の餘剩價值の大部分を取得するのである。何となれば是等の助力なき時の勞働自身の生産物は、指爪を以て木片亦是落果を地上より蒐集し得るに過ぎないであらう。

本書の著者等は國家社會主義者に對する蔑視に於ては、コール氏の如く熱心であつて、寧ろ更に強硬に意見を吐露して居る。即ち「今や勞働者は政治に愛想を盡かし、斷乎として直接行動に變じたのは何等怪しむに足らないではないか。若し法螺吹き連により指導されそして糾斗連に依つて

支持さるゝ現在の無氣力なる労働黨の代りに、議會に於て澄澈たる労働黨が存在してゐたならば、労働黨の精力は僅少なる時間に更に有効に政治的方面に使用されたかも知れない」と。第十六頁に於て彼等は云ふて居る。而して其の二十頁に於ては、「獨立労働黨は是等の善惡兩資質を實證して居る……多少なりとも力ある思想は厘毫も夫れより現はれて居ない。又其の著作物は最も驚くべき愚論のみであつて、其の黨員は死海の陳腐な事實を喰つて生きてゐる。其の創立期の特長たる樂しき友愛の精神は爾來次第に衰微し、同黨は今や内部的爭論、軋轢、嫉視の爲に滅亡に垂として居る。そして安つほく粗末な黨の領袖及び幹部等の漁利の樂園であつて、夫等の人々は黨を社會主義の勝利の爲めの機械とせず、饒舌なる無能力者等に政治的門戸を開く爲めの獨占壇場となさんと試みて居る」と説いてゐる。

是れギルド代表者等が彼等に先立ちて賃銀労働者の境遇を改善せんと努力した人々の効績を評論する精神である。然しながら斯かる精神はギルドにして確立せられたる曉に於て、果して能くギルドの爲めに調和、共同の動作をもたらす所以であらうか。

コール氏の如く兩著者は賃銀と俸給との區別を重大視してゐる。然し無學なる門外漢にとりては、此の微妙な形而上學的區別を理解することは極めて困難であつて、吾人の所見では、人が社會の爲に労働せる代償として貨物及び勤務に交換さるべき貨幣を受取る限り、賃銀と呼ばずして俸給と呼びたりとて、別に何等重大なる革命が行はれ得るものではない様である。然しながら國家的ギルドの兩高僧が此の事實に對して重きを置く處を見れば、何等かの眞に重要な區別が其處に存する事は明らかである。次に論者の説(八〇頁)を引證せん。

「餘剩價値を賃銀労働者に與へずして企業家に確保する障壁は賃銀制度であつて、之れ其の制度を廢止せなければならぬ理由である。今吾人をして倫敦船渠の工事が不定期的に賃銀奴隸の手によらず産業に順應したる軍事精神に一貫され、適當なる組織と統一とを有する労働軍に依り行はれたりと假定せん」と説き出して居る。

茲に一言し度きはコール氏は國家社會主義は「統一」を招來すとして強硬なる抗議を爲せるに、國家的ギルド兩大家が適當に組織され、又統一されたる労働の成立に努めらるゝのは寧ろ驚く可きことである。扱彼等は更に言を續けて曰く(八一頁)「兵士は賃銀を受けるか？ 否、彼等は俸給を受ける。『然し』と實際家は叫ぶ。而してシドニー・ウエツプ氏も叫ぶであらう。『一體賃銀と俸給

との間に實質上の區別があるであらうか。」と。兵士は彼が多忙なると怠惰なるとを問はず、又戦時と平時とを問はず俸給を受ける。傭主が彼に支給するのではない。一定の金額が、年々軍隊を維持する爲に、議會に依つて協賛され、其金額は規定せられたる差別に應じて支給されるのである。兵卒でも將校でも軍人は何れも其の軍隊の生ける組織分子である。彼等は陸軍の法律及び規則に依つて保護される。亦彼は不定期的に解雇徵募せらるゝことなく、其労働は又資本化することは出来ない。かゝるが故に此軍隊を一貫する精神は、賃銀奴隸を支配する精神とは異つてゐる。

此處に於て賃銀と俸給との眞の區別を見るのであつて、俸給は議會に依つて協賛され労働者に對して彼が多忙なると怠惰なるとを問はず支給される。是れコール氏が「實質的需要の存在せる若干の労働力の無常の宿りとして、なく人間としての認識及び支拂」を論じたる際に表明したると同一の見解である。再び吾人はかゝる支拂制度を果して良好なる結果を生ずるや否やを質さなければならぬ。予は嘗つて何人よりも之が解答に就いて、より多く熟知せる聴衆の面前に於てこの問題を提出されたが、夫は予が一九一八年三月白耳義に於ける戦線の後方に於て講演してゐる。

た時であつた。予の演題は「國家財政」であつた。講演後の意見交換に於て賃銀及び俸給に關する此の問題がギルド主義者らしき一兵士によつて提出された。そはつまり何故に賃銀労働者は兵士が支拂はれる如く支拂を受ける事が出来ないのであるかと云ふのであつた。予は普通の生活に於てかゝる制度に依り吾人が當然勤勉な作業を得可きやを疑ふもので、「何人も兵士諸君が戦争に於て如何に奮闘して居るかを知つて居る。併し又諸君が骨の折れる労働を爲さんと出掛けるに當り」と言はんとすると全部の聴衆から起つた洪笑は堂を揺るがし、予はその言葉を結ぶことが出来な

んだ。

予はその數日前に家庭に於てオーレーシ氏の著書を読んだので、恰かも近く戦線より歸來せる一士官に對して軍隊の精神に關する氏の意見を告げたところ、彼は勞役をなしつゝある兵士を見た人は誰も少くとも三倍以上の仕事が普通の状態に於て、賃銀労働者に依り行はるゝ事を認めて居ると言つた。若し労働者が軍隊の戰闘的精神の代りに、勞役的精神を以て労働したならば、議會に依り毎年協賛され得た彼等の俸給の基金は忽ちに驚く可く消耗さるゝであらう。議會は經費を協賛する。然し乍ら貨物と勤勞とが得られなければ其の經費は一片の故紙に過ぎないであらう。

加ふるに兵士等は陸軍の法律及び規則に依つて保護さるゝけれども、又夫れに束縛され彼等にして法規を犯す時は甚だ重き罪に問はるゝのである。然らば産業的軍國主義が果してホブソン及びオーレージ兩氏の理想であらうか？

兩氏は労働者の支給制度に關してコール氏よりも尙ほ一層詳密に論じてゐる。一四六頁に於ては「一度ギルドの一員となる時は、最早や再び失業の苦しみ或は賃銀競争より生ずる慢性的餓死を虞れる必要はない。斯くしてあらゆる運送労働者は彼が誠實に彼に割當てられたる仕事を完成するならば、生活費を受くる権利を有するに至るのであつて、生活費は彼の現在の賃銀に現在失業に依つて失へる金額及び現存せる餘剩價値の割合、即ち地代及び利子に對する彼の現在の仕拂額、並に最後により有効なる組織に依りて得らるゝあらゆる貯蓄を加へたるものに等しいものである。されば彼は現在の如き賃銀を受けない。何となれば彼は現存の標準賃銀よりも殆んど三倍以上のものを取得するからである。」

茲に於て吾人は二個の困難を見るのである。即ち「一度ギルドの會員となること」とあるから、吾人は是等のギルド會員資格は如何にして定めらるべきものであるかと言ふ問題に遭遇するのである。

ある。現在に於ては人々はその一生の勞働を爲す可き職業の種類を多少なりとも選擇するのである。勿論多數の場合に於て經濟的運命、或は僥倖が吾人に或道程を指示することは眞である。而して多くの場合に於て、現在其の選擇は吾人が此問題を解決する意志を有せざるに先ちて、又吾人が選擇を行ふに充分なる經驗及び智識を有せざる以前になされたのである。さりながら尙ほ若干の選擇が爲さるゝのであつて誤れる選擇をなし又なしたりと思ふ人々は、後年に至つて他の職業に轉じ得ると言ふ事はあり得ることであり、又起るのである。然しながら是等の組織され又統一されたるギルドは、會員たらんと欲する向上的青年に如何なる自由を許さんとするか？ 又如何なる方法と如何なる決定に依つて青年労働者が種々なる職業方面に入らんとするに方て生ずる困難なる問題が解決さるゝのであらうか？

是等の問題は明らかに軋轢の無限の可能性を包含してゐるのであつて、夫等は實際的細目を觀察して處理せんとするに當り、他のギルド社會主義の代表者よりもより多くの能力を示せるシー・イー・ペッチホーア及びエム・ビー・レッキット著「國家的ギルドの意義」と言ふ書中に論じられて居る。その三一〇頁に於て「各人は其のギルドを自由に選擇するであらう。而して實際の加入

は労働に對する需要に依つて決定される。實に原則は最初に來りしものを最初に加入せしむると云ふことであらう。若し缺員なき場合には希望者は他のギルドに加入するか或は缺員の出るを待ちて一時的の職業に従事するであらう。

例へば掃除の如き不潔なる職業に於ける労働は大抵一時的のものであつて、一時何れにも加入を得ることの不可能なる人々によつて營まるゝであらう。』

こは凡て甚だ賢明で又實際的である。然し乍らそは向上的ギルド主義者にとりて甚だ愉快なる状態ではないのであつて、若し彼が需要さるゝまで待たなければならぬとすれば、彼の加入せんとするギルドを選択せんとする自由は何れにあるであらうか？ 此點に於て彼は現在資本主義的專制制度の下にあるよりもより幸福ではなく、其間溝浚ひの苦役に貶謫さるゝであらう。加ふるに兩氏は極端なる場合にはギルド組合員は退會せしめらるゝと言ふ事を言つてゐる。然らば其後に於て彼は何うなるであらうか？

再びホブソン及びオーレージ兩氏に依るときは、各労働者は「誠實に割り當てられたる仕事を完成する時」は生活費支給の權利を與へらるゝのである。扱何人が仕事の完成に關する誠實如何を

決定するのであるか？ 恐らく其の決定は労働者に依つて選舉されたギルドの役員に依つて爲さるゝであらう。茲に於て吾人は又ギルドの役員中組合員の爲せる労働の誠實に關し最も寛大なる見解を持つるものが最も聲望あり、隨つて最も選出され易い事を見るのである。此の制度が生産を活潑ならしむるや、否やは、甚だ疑ひを置き得るのであつて、吾人は組合員に割り當てられたる労働を誠實に完成しなかつたものとして正當に、或は不當に誹毀さるゝ不幸なる労働者に如何なる結果が生ずるかを憂ふるの外はない。此の場合に於て彼は明らかに生活費を受くる權利を與へられないであらう。果して然りとすれば、國家的ギルドが實際的需要の存在する労働力の無常の宿りとしてでなく、人間としての認識と支拂とを労働者に確保せんとする最も魅力多き此の制度は何うなるであらうか？ 斯くの如き『自由に善き貨物を作り又は悪き貨物を作る』權利を伴ふ制度がコール氏の理想であつた。然し乍らホブソン・オーレージ兩氏はたゞ労働者に對してその労働力の宿りとしてでなく更に其の誠實有能なる生産者としてのみ支拂を確保せんとするのである。然し乍ら兩氏は更に進んで（一四七頁）に於て『要するに生活費は人生に於ける唯一の考察ではない。』とまで高尚なことを云ふてゐる。こは極めて當然の事であるが、然し乍ら一定額の生

活費なくしては生活は不可能である。事實兩氏はギルド制度の下に於て困難なる時機が到來するかも知れぬが何人も夫れを意としないものと思つてゐる様である。即ち一一一頁に於て吾人は次の文句を見るのである。『賃銀労働者の多数は何人も如何なる時機に於ても賃銀労働者としての彼等の地位を、假令經濟的獨立の地位が財政的収入の永久的なる減少をもたらすとすも、此の獨立の地位と喜んで交換するだらうと言ふ事を疑はない。』又一一三頁に於て、『實際吾人は賃銀奴隷を廢止するなれば現在よりも一層窮乏するかも知れ無い。』と書いてある。

若し賃銀労働者にして眞の自由を得るならば、彼等の多くは恐らく窮乏に甘んずるかも知れない。然し乍ら前に述べたやうにギルドの下に於ける彼等の自由は、吾人の爲に労働する他人の爲に交換的に労働する吾人の凡ての自由の上に課せられたる制限に依つて限定されるのである。そして若しより低き標準が一般にギルド制度の結果であるとするならば、そは明らかに吾人に、より重要な貨物獲得の機會を與へ、有能刻苦の労働及び物質的貨物のより大なる生産に依つてのみ得らるゝ理想の世界に吾人を導かないであらう。

加ふるに同著書の一三六頁には、『賃銀平均の作用が吾人の今日の豫想以上に發達するとも、地

位及び俸給の差別がギルドの能率高き經營に必要な事は當然である。吾人は差等的俸給を恐れない。それが望まじきものでないか何うかは確かでない。唯だギルド財源に関する不公平なる分配のない事は必ず期せられ得る。民主的に管理される組織には寛大過ぐるの弊は殆んど稀れである。然し乍ら經驗は急速にギルドに對して、有爲なる人物を最も強く誘引するの策を講じて技術的熟練を奨励しなければならぬ事を教へるであらう。發明、組織能力、統計的趣味等が適當に報ひらるゝが如き幾多の方法がある。而して是等の能力が報ひられなければならぬ事は當然である。』とある。さればギルドの下に於てすら、各種の労働者に與へられる報酬の割合に多大の相違があつて、此方法を認むる事はギルドが成立する場合其の將來の能率に對して大いに賢明なる獎勵策たるは勿論であるが、同時に又世間に有り勝な軋轢や嫉視に對して門戸を解放するものであつて、報酬の割合が、支拂を受くる人々の選舉した役員に依つて決定される場合は避け難いのである。更に又はは労働者が其生産するものゝ全部を收得すべしと想像された全理想の放棄ではないか。若し『組織、發明、統計的趣味等』が適當に報ひられるなれば、今日個人的資本家が行つて居ると云はれてゐる様にギルドも労働者を強ひて消費を許されない、餘剩價值を作らしめんとする

のではなからうか。

然し乍ら兩氏が其の一四八頁に於て記せる如くギルドに屬する人々の人性の完全なることは是等の論者の確信して居る所である。曰く『吾人は段階組織の成立が差等的報酬の或相當なる形式を要すると言ふ結論を感るゝ要はない。此點に關しては吾人は何等留保せず民主的思想に信賴するものである。吾人は勞働者が立派なる作業及び有能なる經營者に關する最も俊敏なる判斷者であることを信ずる。筋違ひの政治的觀念に煩はさるゝ事なく彼の精神は彼の事業の實際事情に集中さるゝので、『勞働者は利用し得らるゝ最良の人物を高き地位に選舉するものと信賴され得るのである。例へば秤り方の任命に當つて坑夫等は殆んど判斷を誤まらない。勿論時々不正が行はるゝだらう。然し乍ら、そは資本家の子弟の利益の爲に常に無視せられてゐる有能なる人々に對して今日加へられてゐる無數の不正に比する時は殆んど言ふに足らないのである』と。此の勞働者は有能なる秤り方を選擧し得るが故に、彼等は亦何等の教育及び經驗なくして産業の全組織を經營するに足る適任の人々を選択し得るであらうと想像する。此の暢氣な信賴的信念は今日の如き嘲笑的で懷疑的な時代に於て愉快なる光景である。之を攪亂するのは氣の毒である。然し乍ら

此の段階組織や又『發明的組織能力、統計的趣味其他』に對し與へらるべき高率の報酬は、生産物の全體に於て大穴を作るであらう。若し右に述べたる如く勞働者の解放は勞働が餘剩價値の全部を吸収した時に於てのみ可能であり得るものならば、凡て是等の高給を受くる統計家及び段階組織の上位にあるものが同書に於て同一著者等により説かれた地代と著しく類似するものを搾取しつゝある場合に於て、其の解放は遠き將來に屬するであらう。若し資本主義的經營者の俸給がたゞギルドの組合長の高き報酬に代るべきものであるとするならば、其の相違は實際意義あるものであらうか？ デューマの讀者は茶目のシコーがゴランフロー師を欺いて金曜日に鶏を鯉に似せて薦めた處、ゴランフロー師は鶏を食べたかつたので喜んで嘯まされた振りをしたことを記憶するであらう。かの極めて恰憫なる英吉利の賃銀勞働者は、經營者の代りに組合長に『餘剩價値』を手渡す事を求められた際に、名義の變化に依つて同じく喜んで嘯されるであらうか？

ホブソン、オーレージ兩氏は率直に諸種のギルドの間に争鬭の存在するらしきことを容認してゐる。即ち二二八頁に於て彼等は言つてゐる、『吾人は、より有力なるギルドが數々彼等の意志即ち最後の手段として彼等の命令を行はんとするに當りて、弱きギルドの間に不満を生ずる事を期待

し得るのである。然らば如何なる方面に於て、吾人は改善の爲にする不斷の努力を伴ふ不平不満を合理的に豫想し得るのであるか。吾人は主として各ギルドが自己の勞働に附與する價値に對し他のギルドに依つて非難の起り得ることを豫想するのである。「ギルドの財政」と題する章に於て吾人は其の創始期に於て、高度の熟練を要する産業がその勞働に對し所謂不熟練勞働者團體の勞働よりも、より高き價値を主張するであらうと云ふことを述べた……此の争闘は亦例へば同一ギルドの組合員たる機械組立人と其勞働者との間に於ける如く、又は他の同一ギルドの組合員たる石工と其下働きとの間に於ける如く、各種のギルドの内部に於て行はれるであらう。然し乍ら斯かるギルドの内部的取極めは吾人の茲に論じようとする所ではなく、重要な争闘の伴ふのは各ギルドがその勞働と職分との一般的價値を定むるに當り他のギルドと相争ふ場合である。例へば今日農業の報酬が貧弱である。然し乍ら農業的ギルドは、論者等が作りたるギルドの假想的團體の區別に於ては、凡ての組合中人員が最も多數である。然らば吾人は農業的勞働と農産物の再評價に對し其のギルドの執らんとする強硬なる手段を期待し得ないであらうか？……農業の實際の農産物に對する高き評價は、又國民生活に於ける最高重要な要素であると云ふ點より來るのであるが、

その主張は他のギルドに依つて嘲笑的或は寛容的何れの精神を以つて應ぜられるであらうか？此點に就いて過去十年間に於てすら極めて辛辣なる争論が特に勞働の制限に關し、現存せる勞働組合間に發生した事を記憶するがよい。そして若し斯かる大問題が同一の精神を以て解決さるべきものであつたならば、それはギルドの將來の偉大にとり不吉なる前兆たる事を證するであらう。然し乍ら吾人の説明せる如くギルドは現存せる組合ではなく、組合に加ふるに各ギルドの勞働及び頭腦、實際的智能を加へたるものであつて、自から段階組織を生じ産業政策の大問題は信頼を以て之に依託され得るであらう。』

若し實際的智能がコール及びホブソン、オーレーヂ氏等の如きギルド理論の代表者を含むならば、彼等の辨證法及び彼等の論争的態度は既に引證せる如きものであるから、國家的ギルドの社會は愛蘭のドシニイブルツクの歳の市に似たものであらうと思はれる。すでに参照したる著書に於て、レッキット及びベッチホーフアー兩氏はギルド間の争闘の問題に關し次の如く論じて居る。
(三二五頁)「國家的ギルド主義者を當惑せしむるが爲めに屢々提出される質問は、こうである。他のギルドや爾餘の社會に頓着なく全然自己の氣儘に作業を始めた國家的ギルドが出たならば如何に

すべきであるか。是れに對して第一吾人は此の精神は、産業に關する現代の非社會的資本主義制度に取りては自然なれど、ギルド間に於ては不自然であると言ふ事を答へ得るのである。」「然し乍ら爾餘の社會に頓着なく勝手氣儘に作業を爲さしめてゐる非社會的資本家は、忽ちに破産するであらう。」「第二に若しそが或ギルドに發生したならば爾餘の社會に對する此の侮蔑の念は、他のギルドの共同動作に依つて對抗さるゝであらう。……然し乍ら他の組合員に依り虐待されたりと自ら思惟するギルドは同盟罷工の脅威に依つて其不快を表明し得るであらう、然し乍らギルド間の交渉を圓滿に解決するに足る充分なる機關が設けられて、斯かる事態の發生の少からんことを希望するのである。』

然し乍らギルド間の軋轢の尙ほより重大なる原因は、ジー・アール・スターリング・テラー氏の著せる『ギルド國家』と題する最近の著書中に暗示されてある。此の書は一九一九年の秋に出版された。著者は實際にギルド間に於ける競争を推稱してゐるのであつて、こは予が誤解せざる限りギルドを以て、關係産業の全部を包括せしめんとせる初期代表者等の理論に全然反する様である。ホブソン、オーレーシ兩氏は一三二頁に於て、『ギルドは或一定の産業に使備せられてゐる凡ての人

々が單一の團結に組織さるゝ事を意味するものである』と云ふてゐる。又コール氏は一三二頁に於て吾人に、『一産業の全人員を包含する産業組合のみ其の産業に對する支配權を有し得るのである。』と言つてゐる。こは全計畫の主眼なる點の様である。然るに今やスターリング・テラー氏が現はれてその著書の九五頁に於て『若し健全なる競争が例へば都會に於て、相競争せる麵麩屋のギルドの相當なる數の間に行はるゝならば——健全の度を越えざる事を記憶せねばならぬ——確かに幾多の利益があるであらう』と云ふてゐる。

此結果は必ずや消費者にとり幾多の利益を齎らすであらう、然し乍らギルド國家に於ける此の新要素は従前の主張者に依つて建設されたる全組織を顛覆する様である。コール氏は若し勞働者にしてその『情緒状態』より解放されんとせば、必ずや生産や生産物を管理せねばならぬと説いたが、若し若干のギルドが消費者の需要するものを互に競争して生産し、以て消費者の得意を争ふやうになつたならば、その管理なるものは何うなるであらうか？ 又勞働者が良貨物及び不良貨物の何れを作るかを選択するの權利は如何になるであらうか？ 競争の下に於ては消費者は善惡を判別し得る限り良く作られたる貨物を選ぶのである。茲に於てか復た吾人は亦其の意味の何たるか

を怪しむのみである。

最後にギルド主義者が、工場を所有し生産上の失敗の危険を負担する資本家を如何に處分せんとするかを見よう。資本家は單に其財産より解放さるべきものである。そしてホブソン、オーレー、ジ兩氏は資本家を買収せんことを思ふ國家社會主義以上に此の計畫に大利益あることに注意を惹いてゐる。そして其の著書の一七九頁に於て次の如き方程式の形に於てこの利益を現はしてゐる。

國家社會主義の下に於ける生産費＝原料＋經營費用＋地代＋利子＋利潤＋増加賃銀

ギルド社會主義の下に於ける生産費＝原料＋經營費用＋俸給

そして二四〇頁に於て、兩氏はコール氏の「戯曲的行動或は總同盟罷業」に關する暗示をギルド代表者と株主間に一年十萬磅を配當する大なる産業的企業の社長及び總支配人間に於ける對話の形式に於て詳述してゐる。代表者は會社が標準賃銀率を支拂ふことを認めてゐる。然し乍ら労働者は最早や賃銀制度の基礎に於て労働すべからざるものと定められたる事を言明してゐる。第一に賃銀支拂帳簿に上れる労働者は、彼等に對して仕事のあると否とを問はず依然として帳簿に載せて置かなければならぬ。ギルドは労働を供給し利潤の半額を得て事業の組合員とならんとして

ゐるのであつて、五年間の内には更に利潤の若干を取得せんとするのである。それで株主は五萬磅を得ると一文をも得ざると何れを好むかを訊ねてゐる。そして總支配人が資本の將來の供給に關する問題を提出するや、代表者等は快活な態度で斯う言ふのである。「來れ、吾人は夫れを解決しよう、吾人は常に協同することを喜ぶ組合員である」と。そして尙ほ數頁に渉る議論が次なる言明に依つて打切られてある。曰く「あらゆる手段を講じて諸君の株主を召集せよ、然し乍ら勿論、吾人は諸君の言動に對して全然無頓着である事を諒解せられ度い。吾人の申出が一ヶ月以内に承認せられない時は、吾人は諸君の工場を閉鎖するであらう。」

此の拔萃の終りに於て兩著者は思ふに罪の無い衿持を以て、「サミュエル・ジョンソンは常に民黨の犬供に最惡の侮蔑を與へたが此の議論に於て、吾人は搾取者等に最惡の侮蔑を與へたと言ふ事を述べてゐる。彼等の搾取者とは思ふに工場の所有者等を代表する社長及び總支配人のことであらう。代表者が實際言明する所は彼等が工場の所有者等より、生産の際に於ける其の使用の報酬として取得すべき權利ある利子及び利潤を奪はんとすることを、行ふるのである。若し社長及び總支配人が豫期せらるゝ様に次の如く答へたならば如何なる事態を生ずるであらうか？」

『宜ろしい、諸君は吾が株主等が事業に對する利子或は配當を受くることの出来ぬやうな契約を設定せんとしてゐるのであつて、吾人は諸君の條件を容認することは出来ない。そして吾人は諸君に由て代表される人々が吾人の常に支拂つてゐる協定率にて労働するに至るまでは、夫等の人々の勤務を必要としない』然る時資本家は全く無援の状態に陥るであらうか。然りと、確言するは隱當でない。更に下文二八二頁に於て著者等は『生産分配の機關に對する彼等の明白なる法律上の權利に訴へて、彼等暴利を漁する人々は何を爲し得るか』との質問を發してゐる。然し乍ら兩著者は驚くべき矛盾を以て次の如く言つてゐる……『彼等が現在所有する土地、機械と交換に國家は彼等に對して間に合せの正義として、一定の期間或は二代の間公平なる所得を彼等に與ふるかも知れない。』然らば國家社主義以上にギルドに利益ありとの上記の立派なる『方程式』は如何になるであらう。そして兎に角現存の資本主義の制度を倒したる場合に於ては、ギルドは新資本を供給しなければならず、又夫に對して代償を支拂はなければならないであらう。

ギルドの要する機械等の如き資本財は『餘剩價值』に依つて支持され原料を供給する人々の生産に係るのである。苟しくも進歩を望まば實驗と共に危険を冒さねばならず、而して何人か其

の失敗の際も支給して遣らねばならぬ。資本は常に其の賃銀の支拂を受く可きである俸給を取得せねばならぬ。

是れ即ち前來説明せる如き國家的ギルド制度の包含せる矛盾と困難の經緯である。其の主張者の明白なる誠實と眞摯とは、彼等の計畫が未だ實現され得るが如き形式を爲す迄研究を遂げて居らず。又彼等自身が承認するが如く、労働者の快樂標準の低下をもたらす一面に於て、自由の眞の増加を得るを見るのは困難であると言ふ事實に對して吾人を盲目ならしむる事は出来ない。又一ギルドの内部及び數ギルド間の兩方面に於て、重大なる争闘と軋轢とをもたらすと言ふ事は、其主張者の認むる所であつて、又彼等が、他の方法に依つて賃銀労働者の境遇を改善せんと試みる古き社會主義者其他の人々の努力及び成果を嘲笑せんとする性癖は、人をして彼等が果して偉大にして健全なる改革を齎らし得るや否やを疑はしむるのであつて、斯かる事業は斯くの如き精神を以てしては屢々遂行され難いのである。

第十一章 資本主義と自由主義と

前諸章に於て資本主義を擁護するに當り、予は是を以て最善の經濟制度なりと言はんとしたのではなく、たゞ是迄奇蹟を行ひ、且つ將來に於て一層よき奇蹟を實現し得可く、又是迄提出されたる諸制度が資本主義程成功す可きや否やは確かでないと言ふことを述べたのである。予は資本主義の制度の下に於ては資本家即ち工場原料を所有し企業の危険を負担する人々は、賃銀労働者の創造せる「餘剩價值」を彼等より強奪するものでないと云ふ事を示さんとしたのである。何となれば餘剩價值は工場の存在に負ふのであつて、産業設備が彼等に與へた優良なる生活標準に由て賃銀労働者にも分配さるゝからである。工場なくしては労働者は辛ふじて生活を維持し得るに過ぎないのである。素より多くの工場が賃銀労働者の筋肉労働によりて必要な場所に建設された事は事實である。併し是は賃銀労働者が資本家の提供せる監督の下に、資本家に依つて斯かる労働に對し賃銀を支拂はれたるが故に可能であつたのであつて、資本家は其の所得を直接の享樂に費消する代りに、常に多少の危険を負担して其の一部を放資し、以て産業に對し不斷に生産を増大

する設備を施し、斯くして自己一身の爲のみならず尙ほ全國民の爲め、延いては全經濟文明世界の爲に餘剩價值を創造したのである。

資本主義は此の放資をなして危険を負担し、又産業に對して廣義に於ける工場を設備する作業に關し、熟練なる監督の下に労働を應用して人口の大増加を可能ならしめ、以て自然力に對する支配を、そをより能く利用し得る活動的なる企業家の掌裡に委ねたのである。然し乍ら資本主義はその利潤を獲得するに當り、一般消費者の需要に應ぜんが爲めに労働しなればならなかつたので、需要に對する一般消費者の奇癖弱點は多數の粗製濫造を招いたのである。然し乍ら偏狭なる論者が産業革命の吾人に與へたる新らしき力が、資本主義の下に於て如何に用ひられたるやに對し藝術的、道徳的、又常識的理由より攻撃論を爲すにも係はらず、賛成側に於ても亦多くの論據があるのである。吾人は資本主義の下に於て爲し甲斐あることを實行した。サア・レオ・チョッヅ・マネー氏は一九一九年十一月二十三日の日曜新聞「オブザアバ」紙上に於て吾人に告げてゐる。「吾人は石炭に由て製造品の輸出過剰を來すことが出来、其の輸出過剰に由て我國の人口を養ふ食料と工場とに給する原料を購入し、これに依りて更により多くの食料と原料とを輸入する一層多くの

輸出過剰を作る手段を獲得したのである。五代の期間中経續せる此の状態は、一七五〇年には貧弱退歩的なりし農本英國を、第十九世紀の初頭に於ては、ナポレオンと戦ふの資源を得、更に一世紀後に於ては、獨逸軍國主義を破壊するの資源を得たる比較的富裕なる國家に變化せしめた。』

チヨツザ・マナー氏は眞摯にして確信を有する社會主義者なるが故に、經濟上の進歩は資本主義制度の下に於けるよりも、集産主義的經營の或形式の下に於て、より偉大優良なるを得たであらうと信じて居ると云ふことを茲に一言せねばならぬが、氏の信仰は或は正當であるかもしれない。然しながら、アリストートルの言へるが如く、『事實は出發線である。』而してその事實とは是等の事柄が資本主義の下に於て實現され、前の頁に於て示せる如く、此制度の下に於て數百萬の男女が生まれ、而して多くの愉快と幸福との生活を送り而して若干高貴のものが雜炊の間に混じて居つたが、若し資本主義の下に實際行はれた産業的發展が無かつたならば、多數のものは決して此世の光明を見なかつたであらうと云ふ事である。資本主義は他人から、餘剩價值を強奪した杯と云ふは、以つての外のことで、祖先に倣つてその醸せる葡萄酒の凡てを消費せず後世子孫のために、之を穴倉に貯藏せる慈悲深き祖先に比す可きである。而して今日此國に生存せる凡ての人々及び海外にあ

る數百萬の人々は何れも其當時貯藏され、今日に於て吾人の飲用に供せらるゝ香氣馥郁たる古葡萄酒の芳醇を味ふ事を得るのである。若し資本主義が賢明に親切にこの事を實行せなかつたならば、何人も斯程に幸福なるを得ず、且つ吾人の多くは生れ得なかつたであらう。斯くして吾人の凡ては吾人の先祖の貯藏せる葡萄酒を飲用するのであるが、先祖が働いたのは生産的能率に富む社會の一員であつてその勞働が良く報ひられたが爲で、若しその欲望が今日の如くに充足さるゝことは不可能であつたならば、働くことも出來ず、欲せず、働かなんたであらう。若干の人々が法律的權利として葡萄酒の瓶を手にし得るは、此の特權が穴倉に葡萄酒を貯藏せる先祖より彼等に譲られたからであつて、若し吾人が彼等の權利を剝奪したならば、穴倉の貯藏の盡きざる限り他人も亦若干の葡萄酒を得るであらうが、併し吾人の後に來る人々の爲めに貯藏すると云ふことは進んで之を爲すものが無くなるであらう。或は官吏又は委員會が貯藏するかも知れぬが彼等の努力は、一見先見の明を以て貯藏を試みた私人に比すれば廉價にも思はるれど、若し彼等が不良なる葡萄酒を貯藏するか、或は餘りに臆病で新醸造を試みなんだならば、結局社會にとつては高價なる犠牲となるのである。

斯くの如きは吾人の凡てが過去の資本家に負ふ所の負債である。然し乍ら吾人が彼等に對して感謝し之に對する負債を認むる時は、吾人は現在に於ける資本主義の改良進歩に對して留意しなければならぬ。

經濟制度の改善に關し提示されたる諸種の計畫に關する研究に於て、吾人は夫等の計畫が若し實現され得る場合に於ては非常に希望すべきものであるが、併し乍ら提唱されたる改革案に依つては實現され易き様に見える、或は又生産能力の喪失を犠牲にして初めて實行されるが如き幾多の理想を發見するのである。先づ是等の理想の第一位に來るものは經濟的自由に對する希望であつて、吾人の多くは自由が吾人の獲得し得る最も貴重なる寶玉であり、又其の自由の一定量なくしては恰かも巴里製の石膏を塗つた足の發育し得ぬやうに、何人も頭腦及び品性の眞の發達を遂げ得ざる事を認めるであらう。經濟的自由は吾人の多くに取りて勞働するか、又は勞働せざるの自由、又吾人が若し勞働する場合、吾人自らの快樂の爲めに勞働し他人の命令に依りては勞働せざる自由を意味するのである。此意味に於ての自由は人類の大多數に取りて不可能である。何となれば吾人は他人を誘惑して吾人の生活を維持することに努めしめざる限り自から勞働せなければ

ばならぬ。そして吾人の爲す勞働は其の代償として吾人に貨幣を與ふる程何人かに取りては愉快なるものでなければならぬ。又吾人は其貨幣を以て貨物を購入する際の選擇に依り他人の勞働を支配し彼等をして吾人の要する貨物を生産せしめるのである。換言すれば吾人は消費者としての自由を増大する爲めに生産者としての自由を犠牲とするのである。

少數の人々は他人を誘惑して彼等の生活を維持せしめ、又若干の場合には最も廣き意義に於て、土地を包含する産業設備の世襲的所有者として行ふ權利に依つて非常に愉快なる生活を送り得るのである。又他の少數の人々は、勞働に對する肉體的其の他の無能力に依り、社會の同情に訴へて生活を送り得るのであるが、多くの人々は勞働し夫れに依つて他人に満足を與へなければならぬ。若し吾人が荒野に生活して吾人自身の爲めにのみ勞働したとしても、尙ほ吾人は勞働せなければならぬ。唯だ自身を満足せしむるが爲にのみ勞働するのである。かくの如き場合に於ける貨物に對する吾人の支配は著しく減ぜらるゝが故に、斯くして得たる經濟的自由なるものは果して眞に利益をもたらすものであらうか？ 寧ろ吾人は協同を強ひられて他人の需要するものを供給するに努め、以て吾人自身の爲に善き生活を確保、享受するを以て可としないだらうか？ 此の民主的

見解を持つる人々は、偉大なる藝術家が一家を支持するが爲めに、其の繪筆を金錢の爲に賣り、或は詩人が美の女神の彼に唄ふ事を命じた短詩も無學なる公衆の趣味に適せずして餓死するが如き實例を銘記せねばならぬ。但し是等は異常の天才の異例に屬するのであつて、何人も藝術家或は詩人が、社會主義財政委員會又はギルド主義者の任命せる學士院の下に、よりよく暮し得るであらうとは考へないのである。然し乍ら、普通の生活必需品に對しては吾人の作業が他人の判斷に由て左右さるゝと云ふことは、愉快な又眞に「社會的」で社交的な點が存するやうである。そして各人を他人を満足せしむる爲めに勞働せしむる經濟的自由を制限することは、彼等が社會の法則に服従し、彼等の自由を以て他に對する煩累又は自身の自由に對する制限たらしめざる限り、勝手に行動し得可き社會的自由に對する制限に著しく類似するのである。

若し如何なる物を生産すべきや、又其の貨物が製造されたりや否やに關する決定が生産者に委ねらるゝならば、生産者が何等かの報酬を獲得するに先立ち、その生産貨物が消費者の眼前に於て検査に合格しなければならぬと云ふ今日の如き生産物の高き標準を維持する所以ではないのである。而かも斯くの如きは少くともギルド主義者の或ものに依つて目さゝれたる經濟的自由

の理想である様である。何となれば吾人はコール氏が「勞働者は彼等が善き貨物を製造するか或は不良なる貨物を製造するかを選擇する」に當り自由でなければならぬと云ふてるのである。

して見れば若し吾人にして生産上の能率と消費者の如何なる貨物を求むべきかを選擇する自由とを確保せんとせば、經濟的自由をこの範圍まで制限せなければならぬやうである。而して既に指摘せる如く吾人の多くは僅かに一個の貨物或は僅かに其の一部分を生産して無數の貨物を消費する故に、消費者としての吾人の自由は貨物の製造者、或は勤勞の給付者、栽培者としての自由よりも遙かに貴重なものである。

然し乍ら、此の制限に對する必要が容認されてもなほ多數の經濟的自由が残るのであつて、此點に關し資本主義は、少くとも是迄提出されたる爾他の何れの制度の與ふるものと同程度のものを與ふる事を主張し得るのである。

消費者の自由に關しては、資本主義は國家社會主義及びギルド社會主義をして復た競争場裏に立つ能はざらしむる程に凌駕した。國家社會主義を論理的結論に歸着せしむれば、消費者の自由

も亦生産者の自由も等しく行はれぬのである。官吏は何人が如何なる物を生産すべきやを決定するので、消費者は種々の煩雜なる機械を備へた定量制度に於て生産されたるものを受取るか然らずんば之を放棄するのである。コール氏は其の「産業自治論」の一二三頁に於て「あらゆる危険中の最大なるものは、この二十年間キャリスゼニス・ウエップ氏の高唱せる「セルフリッチ」國家である」と論ずるに際し、惡戯的な、併し面白き嘲笑を以て餘りに空想的な繪畫を描寫してゐる。セルフリッチ氏は充分なる選擇を彼の顧客に與へてゐる。而して又敏捷なるキャリスゼニスの助を得て彼等に来て選擇せん事を薦めてゐる。科學的な、そして親切な慈悲心を有するシドニー・ウエップ氏は吾人に對して、吾人のなし得る以上に、より善き生活を興へんとして居る。然し乍ら、その生活は最早や吾人の生活では無いからあらゆる興味を失ふであらう。

そしてギルド社會主義の下に於ては、コール氏に依る時は、生産者は善き貨物を生産すべきか、或は惡き貨物を生産すべきかを選択するの權を有し、又他の論者に依る時は、消費者の利益は表面一つの選舉せられたる團體により代表され風變りの嗜好を有する者に對しては殆んど選擇の機會は與へられず。又スターリング・テラー氏に依る時は、ギルド相互の間に競争があるのである、こ

の場合消費者に機會を與ふるも一面に於ては、公然に獨占制度を標榜する全ギルド組織を破壊する様に思はれる。

然るに資本主義の下に於ては、自由競争の存する限り普通消費者は生産すべき貨物を決定し、少數者の希望も彼等の需要が之を充たす爲めに生産を刺戟するに足る程有力であるならば、直ちに充たさるゝのである。然し乍ら、消費者の自由なるものは資本主義の下にありては、ある程度まで獨占に由り、或は少くともトラスト、「聯合」、合併、團結及び「紳士協約」等の支配的企圖に由り脅威されはしないか。若し資本主義がかかる態度に出るならば、それは單に自繩自縛ハマンの如く絞首臺に高く曝さる可きである。獨占はエリザベス朝以來英人の鼻孔に惡臭を嗅がした。されば若し資本主義にして其の制度を現在行はんとするならば、それは自殺して國家社會主義を求むるものである。然も國家社會主義の下に於ける獨占は、私的企業の下に於けるよりも一層横暴を極むる事は事實である。何となれば政府は夫自身獨占者である故に、頼りなき消費者は自らを保護する官憲の援助を有しないであらう。然し乍ら、假りに獨占ありとするも國家の掌中に於ける獨占は、漁利的章魚族の爲めでなく一般の福利の爲に利潤を作るのであると社會主義は容易に

公衆を説得するのである。既にシドニー・ウェッブ氏は最近の銀行合同に際し、その獨占類似のものゝ遙かに遠かれるにも拘はらず、一九一八年七月の『現代評論』誌上『如何にして銀行獨占を防ぐべきや』と題する論文に於て官營銀行の必要に關する巧妙なる議論の口實とした。

實際國有賛成運動が成功して其の論理的結論、即ち私有資本主義的制度的終熄に進むの曉、私的資本家及び財産所有階級が、若し之をして正當なる發展を爲さしめたらんにはより長き壽命を享受し得たりしものを、却てこの制度を葬むる爲めに如何に多くの拙劣なる行動に出でしやを考察するは、將來の經濟學者に取りて興味ある研究であらう。這般の戰爭中に於ける交戰國政府の愚劣なる財政政策は、通貨を濫發して夫れより生ずる物價騰貴に依り株主及び企業家をして財産を作らしめ、斯くして人心の不安と暴利の嫌疑とを誘起し、以て資本主義の敵に絶好の機會を與へたのである。『講和條約の經濟的影響』と題する著書に於て、流暢なる文體を以て此の問題を論じたるキーンズ氏は二二二頁に於て、『如何なる社會階級も夫れ自身の手に依るに非ざれば滅亡しないと云ふ事は歴史的に眞である』と述べてゐる。然し乍ら、資本主義の城壁の破壊に對しては私的資本家のみが責任を負ふものではなく、寧ろ、彼等の階級に屬する政治家の手に依つて行はれたのであ

つて、彼等の作れる富は彼等をして彼等の立場より國家に奉仕するを得せしめたるがその結果は現今目撃さるゝ通である。

然し乍ら、他の經濟的方面に於ては、資本家は自身の地位を薄弱ならしむるために自から努力したるかの感がある。即ち賃銀労働者の賃銀増額の要求あるに於て、常に我が事業は到底要求に應じ難しと唱へて之を拒絶せしも次でその可能なることを證明せるより、労働者の感情を險惡ならしめ、彼等をして彼等の當然の給與は之を國家より受くるの外道無しと信ぜしむるに至つたのである。出來高賃銀に關する資本家の行動は、此制度に反對する労働者の偏見を増大せしめ、又能率ある生産にとり極めて致命的なる恐るべき見解、即ち優良なる労働者も平均或は最惡の労働者の程度に能率を制限しなくてはならぬと言ふやうの意見を生ぜしめたのである。

資本家をして是等の過失を犯さしめたのは必ずしも資本家が本來の惡人たるが爲ではない。彼等は自己の見識に應じて其の最善を盡す極めて普通の人々である。然し乍ら、彼等は殆んど目前の利益のみを求め、彼等の思想上の眼界は次期の損益對照表作製の日付に依つて制限されてある。彼等が若し、更に遠く將來を遠觀したならば、労働者の労働を求め得る最低賃銀を拂ふよりも彼

等の事業の負擔に堪へ得る最高の賃銀を拂ふ方が彼等に對して結局利益であり、又若し労働者が出來高仕事に於てより多くの賃銀を得たとも、それは出來高賃銀を切り下ぐ理由とはならないで、寧ろ却て労働者をして多くを生産せしむる理由となるものであると云ふ事を解したであらう。彼等は彼等が彼等の金銭上の危険を冒して事を能く知つてゐる。然し彼等は低廉なる賃銀を得てゐる賃銀労働者のうちには彼等の生命を賭してゐるものゝある事を常に記憶してゐたであらうか。

更に又資本家側に於ては彼等の事業の財政的地位に關する詳細明白なる説明の發表をする事を極端に嫌惡する傾向がある。公共會社の發表する決算報告は往々にして出來得る限り何等の知識をも與へざる様に編成されてゐる様である。此の態度に對しては、寧ろ隠蔽を可とする事柄に對し競争者の看破力を成る可く防がんとする希望によりて幾多辯解せられる。之に反して、若し或産業に於ける労働者が其の産業の財政的方面が如何に處理されてゐるかをより明らかに知り得たならば、又其の經營者等が處理しなければならぬ問題が彼等の理解し得るが如き方法に於て彼等の前に提示されたならば、測るべからざる利益があるであらう。此の制度に依り偉大なる價値を有する提案が賃銀労働者に依つて爲さるゝかも知れない。彼等が労働する條件の管理に關しては、

今や一般に改革が當然必要であると認められてゐる。然し乍ら、過去に於ては資本家備主等は彼等自身にのみ關係ある事項に對する干渉としてこの問題の提出を憤慨したのである。

此等の方面に於て改良を行はんには、例へば國家又はギルド社會主義に依る産業の圓滑なる運轉に必要なが如き人性の革命的變化は必要でない。吾人は凡て吾人自身に對する何等の考慮なくして他人の爲めに労働せんとする熱心を急に發露し無くてもよい。資本家は現在彼等の爲せる如く社會の需要を充して以て自己の爲めに利潤を得んと働くであらう。又彼等の最も優良なるものが既に爲せる如く彼等が拂ひ得るよりも少く労働者に支拂ふ事に依りて、目前の巨利を博せんとするは、結局に於て彼等自身の爲めに不利なるのみならず、社會に取りても不利なる拙劣なる政策である事を承認しなければならぬであらう。蓋し社會の繁榮と安寧とは彼等の由て以て事業を營み得る基礎である。若し彼等が獨占に對する種々の企圖に依つて消費者の敵意を、又彼等の富の彼等に與ふる力の濫用に依つて、賃銀労働者の敵意を挑發するならば、それは彼等自ら自己の經濟上の頸を絞むる繩を撚りつゝあるものなることを顧みる時は、彼等は自己及び凡ての他の人々に對して大いに利益となる教訓を學ぶであらう。

資本家は彼等のために労働する人々に對する彼等の近視的態度の外、之れを冷靜なる第三者より見る時は、其獲得したる富の使用に依り彼等自身の地位を覆没するに努めてゐるやうである。知識階級と呼ばれてゐる人々の間に盛に行はれてゐる學究的社會主義の多くは、野卑なる虚飾のために金錢を浪費する成金輩の示せる痴態に原因してゐる。富を獲得し又は所有する人々は凡て其富に關して如何に彼等が原料の一部の如く、繁忙隆昌なる社會の存在に負ふ事の大なるかを、又斯かる環境を離れて彼等のなし得たるものが如何に小であり、従つて彼等に其機會を與へたる社會に依つて其富が彼等のため如何に儲けられたるかを記憶しなければならぬ。彼等の浪費は産業に對して不良なる貨物の生産を求むるのである。價值ある公共の目的に利用することにより彼等は英國に於ける多くの醜惡、不振なる都市の外觀を改造し、出生せる各市民を身心共に完全に發育せる健全優秀なる男女に育成する機會を、吾人に與ふる事を得る教育制度を吾人に與ふるを得るのである。吾人は光景の餘りに偉大急速なる變化を求めてゐるのかも知れない、然し乍ら、資本家が奢侈に金錢を浪費する場合、獨り輿論を激發せしむるのみならず必需品の價格を騰貴せしめ、斯くして自己の生存の依つて立つ社會の安寧にとり極めて危険なる不公平を強むる事を資本

家に於て戒心せん事を望むは決して過當ではない。

是等の不公平は資本家傭主等の彼等の爲めに労働する人々に對する態度が前に暗示せる如く改革されたならば急速に減少するであらう。然し乍ら吾人は同時に他面に於て彼等が資本主義は労働者を搾取する兇惡なる怪物ではなく、労働者の境遇を改善し、資本主義の下に行はれたる産業發展なき時は、出生することを得なかつた幾多の人々に生命を與へたる制度であることを承認する労働者に依つて攻撃されんことを望むものである。資本家雇主の短見に依り彼等は境遇の改善を得るが爲めに苦戦しなければならなかつた。然し乍ら、彼等が資本家に對する従屬より解放せられん事を欲するに於ては、彼等自身資本家となり夫れなくしては労働が生産に従事し難い經營、組織及び工場を自ら提供することに依つて自己を解放する方が寧ろ安全容易ではあるまいか。

此の目的の爲には、又人性に於ける大なる變化を要しない。唯だその消費組合運動に於て驚くべき効果を挙げたるが如き方法の發達を要するのみである。戰時貯蓄獎勵運動は、從來決して貯蓄しなかつた幾多の人々に對し、國家が外敵に脅威されたる場合に、國家を救はんが爲めに貯蓄することを教へた。故に目下爲す可き策は此運動を繼續することて以て階級の反目を齎らす内敵より

國家を救はねばならぬ。吾人は現在に於て政府の有價證券に投資せられてゐる賃銀労働者の貯蓄が、特殊の産業或は會社に對する放資に伴ふ危険を犯す事なくして産業に投資され得るが如き財政組織を要するのである。こゝは財政的技術が當然解決し得る問題である。労働者は既に彼等が資本家となり得ることを示した。然し乍ら、更に彼れ等の多くが、更に結局に於て彼等の凡てが資本家たらん事を望むのである。かくて若し世間の富者が依然として青年を怠惰に育て上げる事が彼等の爲めに利益でない事を益々多く認むるに至らば、吾人は各労働者が資本家であり、各資本家が労働者である如き状態を始めて見るであらう。

擧て教育の改善により凡ての人に對して人生に於ける物質的成功のより善き機会を與へ、又勇氣、誠實、創意力、及び責任負擔能力等の必要なる資質を有する凡ての人々に對し成功の機会を與へなければならぬ。資本主義の缺陷に基き劣等なる資質が往々にして巨額の報酬を獲得することあるも、右の資質は資本主義の下に於て最も確實に成功をもたらす資質であつて、夫れ等の資質は又偉大なる國民を作る資質である。是等の資質が完全に發達し自由に其の能力を發揮するならば、凡ての人々が消費者の需要を充たすが爲めに盛に競争し、又富が公平に分配さるゝ故に大なる

利潤は全社會に對し最良の貢獻を爲せる人々に依つてのみ得らるゝが如き國家を生ずるであらう。大いなる利潤は、それが獲得されたる場合に於て、個人的享樂の爲には其の消費が節約され、有益な公共の目的に對しては盛に投ぜられて、或は再び、それを産業に放資し依つて以て生産を早やめて労働に對する需要を増加するのである。そして物質的成功は何れに於ても發揮さるゝ精力、創意力、勇氣に對する賞與であり、斯くして活動的に大膽な、そして進取的なる男女の最良なる能力を刺戟するであらう。斯かる制度は官僚的管理の下にある國家社會主義或は獨占と職分に依り結合せる社會とに立脚するギルド社會主義の制度よりも自由を愛好する人々に取りては、より多く誘惑的である。この制度は吾人が現今想像し得ざる程度に生産を刺戟するであらう。そして貨物の供給、分配の問題を解決し、その制度の下に生活せる人々をして、自ら新文明を建設し共同の利益の爲めに競争、協働する聰明な美しい高貴な男女に充ちた富裕な、而かも美しく高貴なるべき世界を實現する事業に従事するを得しむるであらう。

大正十一年十一月十五日印刷
大正十一年十一月二十日發行

定期刊行書第五刊

にめたの義主本資

譯者 田中萃一郎

發行者 東京市赤坂區溜池町二番地
中外文化協會代表者 柴田範治

印刷所 東京市麴町區飯田町五ノ十九番地
武井光雄

東京市赤坂區溜池町二番地

中外文化協會

電話 國芝六二〇六番
振替東京五六二六八

發行所

本會の事業要領

刊行 (イ) 世界的名著の翻譯出版(定期刊行書)
 (ロ) 時事問題研究の叢書出版

講演事業 隨時講演會を開催して新智識を普及し堅實なる國民的思想の向上に努む

學藝獎勵 優秀なる學者藝術家發明家にして資力に乏しきもの、後援をなす

入會略規 (詳細は會則に就い)

贊助會員 本會刊行圖書を無料贈呈
 本會の進言に賛成し金五百圓以上を贈出するもの又は學術上の後援をなすもの

甲種會員 毎月一回定期刊行書特製頒布
 毎月拂 毎月五圓宛十二回拂込……計一ヶ年金六拾圓也
 貳回拂 第一回拂込金拾圓也。第二回拂込金貳拾七圓也
 一時拂 入會と同時に全額拂込……計一ヶ年金五拾七圓也

乙種會員 毎月一回定期刊行書並製頒布
 毎月拂 毎月四圓宛十二回拂込……計一ヶ年金四拾八圓也
 貳回拂 第一回拂込金貳拾圓也。第二回拂込金貳拾六圓也
 一時拂 入會と同時に全額拂込……計一ヶ年金四拾六圓也

會員の特點 本會の定期刊行書は預約出版物に非ず。刊行の圖書は前以て通知し、會員にのみ頒つ。會員に限り本會刊行の圖書(定期刊行書を除く)總て二割引にてお買ひに應ず。

申込所 東京市赤坂區溜池町二番地
 中外文化協會
 電話 四六二〇六番
 總管口座東京五六二六八番

中外文化協會々則

第一條 本會ハ東西ノ文明ヲ攻究シ之ヲ渾一シテ新ニ日本文化ヲ建設スルヲ以テ目的トス

第二條 本會ヲ中外文化協會ト稱ス

第三條 本會ハ本部ヲ東京ニ置キ、各地ニ支部ヲ設ク

第四條 本會ハ其目的ヲ達成セムガ爲ニ左ノ事業ヲナス
 (イ) 圖書出版 (ロ) 講演事業 (ハ) 學者藝術家發明家等ノ後援

第五條 本會々員ヲ分チテ左ノ三種トス
 (イ) 贊助會員 本會ノ趣旨ニ賛成シ金五百圓以上ヲ據出シ又ハ學術上ノ後援ヲナスモノ
 ● 本會刊行ノ圖書ヲ永久ニ贈呈ス
 (ロ) 甲種會員
 ● 毎月一回本會定期刊行圖書(特製)ヲ配布ス
 ● 本會講演ヲ隨意聽講スルコトヲ得

(ハ)乙種會員

● 毎月一回本會定期刊行圖書(並製)ヲ配布ス

● 本會講演ヲ隨意聽講スルコトヲ得

第六條 本會ハ會員ノ相互組織トナシ會員三千名ヲ基礎トナシ其以上ハ會員ノ増加スルニ從ヒ漸次會費ノ遞減ヲ行フモノトス

本會役員 (イロハ順)

顧問	文部大臣	鎌田榮吉
顧問	慶應義塾大學教授	田中萃一郎
顧問	東京帝國大學總長	古在由直
顧問	東京商科大學學長	佐野善作
顧問	醫學博士	賀田種太郎

本會定期刊行書名

英人の見たる 日本海上勢力史 (刊十二月行)	米國對歐 債權關係 (刊十二月行)	資本主義の ために(既刊)	人力と能率 (既刊)	宗教と科學 (既刊)	氣候と文明 (既刊)	財産制度の發達 (既刊)	
本會編輯部校閱序文	ジエ、シ、エフ、バス エチ、シ、ムールト 法學士 内海源男 譯	ハートレー、ウ井ザース 博士 田中萃一郎 譯	フレデリック、エス、 マスター、オヴ、アーツ 柳澤泰爾 譯	シエ、シ、ハードウイック 法學士 戸田千葉 共譯	エ、ズ、ス、ハンチントン 博士 田中萃一郎 序	ホー、ラ、フ、アル、グ 法學士 河田嗣郎 校閱 エ、ズ、ス、ハンチントン 博士 藤田敬三 譯	教授大 間崎万里 譯

文學博士 フロトル、オプ、 フロソフ、井一	文學博士 長瀬鳳輔	文學博士 長瀬隆二	文學博士 村川堅固	文學博士 宇野哲人	文學博士 上杉慎吉	文學博士 上田貞次郎	文學博士 占部百太郎	文學博士 上杉彌一郎	文學博士 小川壽夫	文學博士 桑木嚴翼	文學博士 山内繁雄	文學博士 山本美越乃	文學博士 小村欣一	文學博士 安岡秀夫	文學博士 矢部謙次郎
文學博士 內藤虎次郎	文學博士 長瀬鳳輔	文學博士 長瀬隆二	文學博士 村川堅固	文學博士 宇野哲人	文學博士 上杉慎吉	文學博士 上田貞次郎	文學博士 占部百太郎	文學博士 上杉彌一郎	文學博士 小川壽夫	文學博士 桑木嚴翼	文學博士 山内繁雄	文學博士 山本美越乃	文學博士 小村欣一	文學博士 安岡秀夫	文學博士 矢部謙次郎
文學博士 松村任三	文學博士 松本亦太郎	文學博士 遠藤隆吉	文學博士 江木翼	文學博士 明石徳一郎	文學博士 齋藤斐章	文學博士 坂口昂	文學博士 笹川種郎	文學博士 佐々木惣一	文學博士 氣賀勘重	文學博士 湯原元一	文學博士 三宅米吉	文學博士 下田將美	文學博士 白鳥庫吉	文學博士 平沼淑郎	文學博士 松村任三

田中萃一郎氏序
村田岩次郎氏著

勞働災害

四六版總布製箱入美本
定價貳圓也
送料金八錢

法學博士田中萃一郎氏序文
村田岩次郎氏著

勞力保全

近刊

プレステッド氏原著
慶大教授間崎万里氏譯

歐洲上古文化史

大正十二年
春季臨時刊行

375

56

終